

令和 5 年度病虫害発生予報第 3 号（7 月予報）

今月の発生に注意を要する病虫害

作物名	病虫害名	発生時期	発生量
カキ	炭疽病	早い	やや多い
	うどんこ病	平年並	やや多い
ナシ	黒斑病	平年並	やや多い
	黒星病	平年並	やや多い
チャ	チャノコカクモンハマキ・ チャハマキ	やや早い	やや多い
	チャノホソガ	やや早い	やや多い
ネギ	ネギアザミウマ	平年並	やや多い
キク	白さび病	平年並	やや多い
野菜類・花き類共通 (ホウレンソウ、キク)	アブラムシ類	平年並	やや多い
野菜類・花き類共通 (キク)	ハダニ類	平年並	多い
野菜類・花き類共通 (夏秋トマト、キク)	アザミウマ類	平年並	多い

○気象予報（近畿地方の 1 ヶ月予報：7/1～7/30）

気温：平年並および高い確率が 40% 降水量：平年並および多い確率が 40%
日照時間：少ない確率が 40%

○今月の農業適正使用のポイント

6 月 1 日～9 月 30 日は農業危害防止運動の重点実施期間です。農業のラベル記載事項の遵守と使用履歴の記帳、ドリフト対策の徹底、薬剤の適正な保管管理等、農業適正使用について指導の徹底をお願いします。

農業のラベルに記載された適用作物名について、思い込みや読み違いによる誤使用が起こる可能性があります。以下のような作物間ではいずれも農業登録内容が異なりますので、特に注意して下さい。

○トマトとミニトマト

○ピーマンとシシトウ

○実えんどう（未成熟な種子を収穫するもの）とさやえんどう（未成熟なさや付き豆を収穫するもの）とえんどうまめ（成熟した種子を収穫するもの）

○さやいんげん（未成熟なさや付き豆を収穫するもの）といんげんまめ（成熟した種子を収穫するもの）

○メロンと漬物用メロン、すいかと漬物用すいか

その他、判断に迷った場合には、各農林（農業）振興事務所または病虫害防除所へお尋ねください。

I. 普通作物

1. 水 稻

(1) いもち病（葉いもち病）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は中山間地域3%でした。平坦地域では発生は認められていません。
- 2) 今後、天候不順が続くと発生が拡大する恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 中山間地域において出穂前に葉いもちの初発を確認したら、直ちにブラシンプロアブルで防除します。
- 2) 穂いもちの予防に粒剤を使用する場合、オリゼメート粒剤は出穂の3～4週間前までに、コラトップ粒剤5は出穂30日～5日前までに処理します。粉剤や水和剤を用いる場合は、出穂始めと穂ぞろい期の2回が防除適期です。1回防除の場合には出穂始めに防除します。
- 3) ほ場の周囲に収穫期の野菜等がある場合には、ドリフトを避けるため、粉剤や水和剤は使用せず、必ず粒剤で防除します。
- 4) 粒剤を施用する場合は、処理前に湛水し、処理後1週間は必ず止め水管理をします。

(2) 紋枯病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では発生は認められていません。
- 2) 今後、気温が高く推移し適度な降雨があると、本病の病勢が進展します。

防除上の注意事項

- 1) 防除適期は中山間地域では7月上旬～中旬、平坦地域では7月下旬～8月上旬です。常発ほ場では遅れないように防除を行います。また、中山間地域の発生ほ場では、8月中旬までに中位葉鞘への病斑の上位進展が認められれば、直ちに追加防除を行います。
- 2) 水和剤や粉剤で防除する場合には、株元に薬剤がよくかかるように、落水してから防除します。

(3) ばか苗病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、発生は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) ほ場内をよく観察し、発病が認められた場合にはすみやかに株ごと抜き取り、焼却するか地中へ埋設して処分します。特に採種ほ周辺では、発病株の抜き取りを徹底します。
- 2) 発生ほ場では自家採種を控え、種子更新を行います。また、次年度の種子消毒を徹底します。

(4) ニカメイチュウ第1世代

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、発生は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) 株元を中心に寄生や被害がないかよく観察します。被害を確認した場合は、トレボン粒剤で防除します。

(5) トビイロウンカ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6/27日現在で、農業研究開発センター（桜井市池之内）内の予察灯へのトビイロウンカの飛来は認めていません。

- 2) 6月中旬の巡回調査では、本田での発生は認められませんでした。
- 3) 今後、梅雨前線が停滞すると、突発的に飛来する可能性があります。前線が停滞するような場合には病虫害防除所ホームページの誘殺情報をご確認ください。
- 4) 3ヶ月予報では、8月の気温は平年より高いと予想されています。7～8月に高温に見舞われると、飛来が少なくても本田で急増して9～10月に坪枯れが発生する可能性があります。夏が高温になった場合は、病虫害防除所から発表する情報に注意してください。

防除上の注意事項

- 1) トリフルメゾピリムを含む箱粒剤やリディア箱粒剤、アレス箱粒剤を処理していない場合は、念のため7月上中旬にトレボン粒剤を処理します。

(6) イチモンジセセリ (イネツトムシ)

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、発生は認められませんでした。

防除上の注意事項

- 1) 防除適期は7月4半旬から6半旬で、この時期はウンカ類やコブノメイガ、紋枯病などと同時に防除することができます。
- 2) 7月下旬までに出穂する品種は防除が不要です。

(7) 斑点米カメムシ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、中山間地域での発生ほ場率は13%でした。
- 2) 本田内での優占種はアカスジカメムシでした。

防除上の注意事項

- 1) 水田周辺のイネ科雑草に対し、水稻出穂の20日前と出穂直前の2回除草しておくとかメムシの侵入が減少します。ただし、1回の除草のみでは逆にカメムシが増加する場合があります。20日前の1回除草の場合は、出穂期の薬剤防除を併用します。また出穂期のみ1回除草はカメムシを水田に追い込むこととなりますので控えます。
- 2) カメムシ被害は水田の畦畔沿い（外から1m幅、通称・額縁部）で多くなります。そのため、この部分の防除は高い効果が得られます。
- 3) 周辺で養蜂が行われている地域では、農薬の使用に際し、事前に関係者への情報提供を行う等十分な危害防止策を講じます。
- 4) 休耕田や管理不十分な雑草地など、斑点米カメムシ類の増殖に適した生息地が増えていますので、注意が必要です。

II. 果樹・チャ

1. カキ

(1) 炭疽病

予報内容 発生時期：早い 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査において、新梢での発病枝率は0.8%でした。一部多発園もみられます。

防除上の注意事項

- 1) ふところ枝や軟弱徒長した枝は、病気の発生源となりやすいので早めに除去します。
- 2) 罹病新梢や発病果を発見した場合は、周囲への伝染源となりますので必ず除去し園外へ持ち出して処分します。
- 3) 梅雨期は炭疽病の感染盛期ですので、前年および本年発生園では、基幹防除に加えて7月上中旬（6月後半の防除から10日～2週間後）に殺菌剤散布を必ず実施します。

(2) うどんこ病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、発病葉率は3.1%とやや多くなっています。

防除上の注意事項

- 1) 葉の病斑（黒い小斑点の集まり）が目立つ多発園では、7月上中旬に炭疽病・落葉病防除を兼ねて薬剤散布を行い、病勢の拡大を防ぎます。

（3）円星落葉病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 前年秋期の発生状況から、園地の菌密度はほぼ平年並みと考えられます。

防除上の注意事項

- 1) 6月～7月前半が主要感染時期であり、定期的な予防散布を行います。
- 2) 昨年多発した園では、7月上中旬（6月後半の防除から10日～2週間後）に追加防除を実施します。

（4）チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、被害果率は0.1%でした。

防除上の注意事項

- 1) 7月上中旬に第3世代、7月下旬に第4世代の発生がピークになると予想されます。
- 2) 昨年度の多発園や被害が目立つ園では、薬液がかかりやすいように夏せん定を実施した上で、7月上旬と下旬に防除を行ってください。

（5）フジコナカイガラムシ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、寄生果率は0.8%でした。

防除上の注意事項

- 1) 防除適期は6月下旬頃の若齢幼虫期です。未防除の場合は速やかに防除します。また、散布むらのない様にていねいに薬液を散布します。
- 2) 発生の目立つ園では、6月下旬の基幹防除から7～10日後頃に追加防除を実施し、第1世代幼虫のうちに密度をしっかりと低下させることが重要です。
- 3) 枝が混み合っている所や高枝等、薬液のかかりにくい部分は防除前にあらかじめ整理します。

2. ナ シ

（1）黒斑病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、発病葉率は3.9%とやや多くなっています。
- 2) 徒長枝葉の発病が目立っています。

防除上の注意事項

- 1) 梅雨が明ける7月中下旬頃までが感染の最盛期です。新梢葉の発病に注意して7月中下旬まで降雨量に応じて防除を行います。
- 2) 薬剤散布は、棚上の徒長枝先端部にもしっかりと薬液がかかるように散布します。

（2）黒星病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、発病葉率は3.4%とやや多くなっています。

防除上の注意事項

- 1) 梅雨期の降雨により発病が増加します。病斑の認められる発病葉や発病果は、周囲の葉・果実への伝染源となりますので、できる限り取り除き、園外へ持ち出し処分します。特に、園の外周部や枝の混み合った部分など、薬液のかかりにくいところは多発している場合が多く、入念に確認しておきます。また、薬液のかけむらのないよう十分に注意します。
- 2) 多発園では、梅雨期間中は約7日間隔で防除を実施します。同一系統薬剤の連用を控えます。

(3) ハダニ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、寄生葉率は0.3%でした。

防除上の注意事項

- 1) 例年梅雨明け後に急激な密度上昇がみられますので、現在発生が少ない場合でも注意が必要です。こまめに園を観察し、初期防除を徹底します。
- 2) すでに発生が目立つ場合は、梅雨の晴れ間に防除を行い、梅雨明けまでにハダニの密度を減らしておくことが重要です。
- 3) 薬剤散布はていねいに行い、散布むらのないようにします。
- 4) 不要な徒長枝を置かない、重なり枝を作らない等、栽培管理面でも薬液がかかりやすいような工夫を心がけます。

3. 果樹共通

(1) カメムシ類（チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシ・クサギカメムシ）

予報内容 発生時期：遅い 発生量：少ない

予報の根拠

予報の根拠

- 1) 果樹・菓草研究センター（五條市西吉野町湯塩）内及び県内各所の予察灯では、おおむね5頭/日以下と、チャバネアオカメムシの誘殺数は少ない状態が続いています。
- 2) 6月下旬の巡回調査において、チャバネアオカメムシの寄生はほぼ確認されませんでした。

防除上の注意事項

7月中は特別なカメムシ防除は一部の常発園を除き必要ないと思われれます。ただし、8月以降の新成虫の発生動向については、今後のカメムシ情報に注意が必要です。

5. チャ

(1) 炭そ病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月中旬の調査での発生圃場率（一番茶摘採残葉の発生）は75%でした。

防除上の注意事項

- 1) 梅雨期は炭そ病の感染盛期のため、梅雨の晴れ間に防除を行います。

(2) チャノコカクモンハマキ・チャハマキ

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 大和茶研究センター（奈良市矢田原町）内のフェロモントラップへの誘殺数は平年よりもやや多くなっています。

防除上の注意事項

- 1) 発蛾最盛期の7～10日後が防除適期です。（6月下旬から7月上旬が発蛾最盛期と予想されます。）

(3) チャノホソガ

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 大和茶研究センター（奈良市矢田原町）内のフェロモントラップへの誘殺数は6月第3半旬（6月中旬）が最も多くなっています。最大誘殺時期は5カ年平均よりも5日早く、最大誘殺数は約1.4倍多くなっています。

防除上の注意事項

- 1) 新芽生育期に産卵が確認された場合は、必ず防除します。
- 2) 摘採間近に巻葉が見られた場合は、早めに摘採します。

(4) チャノミドリヒメヨコバイ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月中旬の調査での発生圃場率は87.5%でした。
- 2) 落とし法による落下虫数は0.42匹でした。

防除上の注意事項

- 1) 新芽生育期の発生状況を把握し、萌芽期から開葉期までの適期に薬剤散布を行います。

(5) チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月中旬の調査での発生圃場率は87.5%でした。
- 2) 落としによる落下虫数は1.7匹でした。

防除上の注意事項

- 1) 新芽生育期の発生状況を把握し、萌芽期から開葉期までの適期に薬剤散布を行います。

(6) カンザワハダニ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月中旬の調査での発生圃場率は37.5%でした。
- 2) 寄生葉率は0.02%でした。

防除上の注意事項

- 1) 発生が認められる場合は、早期に薬剤散布を行います。
- 2) 発生圃では2番茶摘採後にも防除を行い、密度低減に努めます。
- 3) 薬剤の感受性が低下するので、年間を通じて同一系統薬剤の連用は避けます。

Ⅲ. 野菜類・花き類

1. イチゴ（育苗）

(1) うどんこ病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月下旬の育苗床の巡回調査では、発生ほ場率25%、発病葉率1.9%でした。
- 2) 7月上旬に曇天が続くと発生が拡大する恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 雨よけ栽培や寒冷紗被覆下で過繁茂になると発病が拡大しやすいので、注意が必要です。
- 2) 葉かきやランナー整理を行い、薬剤をかかりやすくしてから防除します。一定のランナーが確保できれば、混み合わないよう親株を早めに除去します。
- 3) 薬剤防除は、発生初期にサンヨール、スクレアフロアブル等を用いて防除します。薬剤耐性菌の出現を避けるため同一系統薬剤の連用はせず、育苗期の防除を徹底します。ただし、これらの薬剤は高温および乳剤との混用や機能性展着剤の添加によって薬害が発生する場合がありますので注意します。

(2) 炭疽病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、発生は認められていません。
- 2) 昨年本病の発生が多かった育苗ほでは、ほ場や周辺雑草等の保菌率が高い可能性があります。

防除上の注意事項

- 1) 発生前からアントラコール顆粒水和剤、ジマンダイセン水和剤、ベルコート水和剤による定期的な予防に努めます。
- 2) 親株およびランナーや周囲の子苗での発病を早期に発見し、発生部とその周囲をシートや古ビニールで被覆後、直ちにゲッター水和剤を散布します。
- 3) 夜温が25℃以上となる7～8月の高温・多湿時に多発しやすいので、古都華、アスカルビー、章姫等の罹病性の品種では、苗床が混み合って蒸れないように、必ず苗床の株の整理を行います。
- 4) 多かん水や排水不良による過湿は、本病の発生に好適な条件となりますので注意しま

す。底面かん水法による雨除け育苗は、本病の防除に非常に有効です。

(3) 萎黄病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月下旬の苗床の巡回調査では、発生は認められていません。
- 2) 今後、気温の上昇によって発病が助長されます。

防除上の注意事項

- 1) 発病株は、周囲の培土およびランナーも含めて早期に持ち出し、肥料袋等に入れ密閉処分します。
- 2) 苗床での根傷みは発病を助長します。特にオガクズベンチ育苗ではかん水不足による根のやけに注意します。底部に水が溜まらないよう不織布で排水します。
- 3) ベッド育苗では高畝とし、大雨時に苗床が浸水しないように排水対策を徹底します。
- 4) 本ぼの太陽熱による土壌消毒は、遅くとも7月中旬までに処理を開始し、8月中旬まで1カ月以上処理します。処理前には十分注水しておき、処理途中での追加注水は地温を下げるので避けます。処理中には、被覆ビニールの破れ等がないか必ず点検します。
- 5) 本ぼの土壌消毒後は、汚染土壌の付着や移動により病原菌を持ち込まないように、農作業や浸冠水に注意します。

2. ナ ス

(1) 褐色腐敗病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、発生は認められていません。
- 2) 今後、天候不順が続くと発生が拡大する恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 降雨が続くと、発病が助長されます。ホライズンドライフフロアブル、ランマンフロアブル等による予防散布を励行します。
- 2) 被害枝葉及び果実は伝染源となるので、必ず早期には場外へ持ち出し処分します。
- 3) 病原菌は水によって伝染するため、ほ場及び畝上の排水を良くし、敷きワラやマルチによって降雨による「はね上がり」伝染を回避します。

(2) うどんこ病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、発生は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) 多発ほ場では整枝剪定を行って通風を良くし、多肥栽培を避け、適切な肥培管理による樹勢維持に努めます。
- 2) 病気まん延後の薬剤防除では効果が劣りますので、予防および発生初期の薬剤防除を徹底します。

(3) カスミカメ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 33%でした。

防除上の注意事項

- 1) 食害による新葉の奇形、萎縮が見られたら薬剤防除します。
- 2) 被害が発生しているほ場では、スタークルまたはアルバリン顆粒水溶剤で防除します。ただし、土着天敵の減少によりミナミキイロアザミウマが増加しますので、「6. 野菜類・花き類共通 (2) ミナミキイロアザミウマ」の項を参考にして、別途対策を行います。

(4) ニジュウヤホシテントウ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では発生は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) 横縞模様の特徴的な食害痕を発見したら薬剤防除します。
- 2) ミナミキイロアザミウマ対策のため土着天敵保護に取り組んでいるほ場では、アクセルフロアブルで防除します。
- 3) カスミカメ類の薬剤防除を行ったほ場では、防除は不要です。

(5) チャノホコリダニ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では発生は認められていません。
- 2) 梅雨明け後に増加しますので、今後の発生に注意が必要です。

防除上の注意事項

- 1) 生長点付近をよく観察します。発生初期には新芽の伸張が悪く、新葉の葉裏にやや褐色がかかった光沢が観察されます。果実被害が発生してからでは防除効果が劣りますので、発生初期の防除を心がけます。
- 2) 登録のある殺ダニ剤はいずれも殺虫効果が高いですが、土着天敵温存に取り組んでいる場合は、スターマイトフロアブルまたはアプロードエースフロアブルで防除します。

3. ホウレンソウ

(1) 萎凋病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月下旬の中山間地域での巡回調査では、発生は認められていません。
- 2) 今後、気温の上昇により発病が助長されます。

防除上の注意事項

- 1) 発生ほ場で連作する場合は、薬剤または太陽熱による土壤消毒を実施します。
- 2) 薬剤による土壤消毒では、処理前の土壤水分の調整が重要です。土をしっかりと握って、土塊に少しひびが入る程度が適当です。土が乾燥していたり、過湿の場合、薬剤の処理効果が著しく低下しますので、注意します。土壤の耕耘は処理の直前にていねいに行い、薬剤処理後は直ちにガスが漏れないように新しいフィルムで土壤表面をきっちりと被覆します。
- 3) 消毒後は、汚染土壤の持ち込みや浸冠水による病原菌の侵入を防ぐため、農機具や長靴についた泥や雨水等の流入に十分注意します。

(2) ネギアザミウマ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 25%、被害株率 1.3%でした。
- 2) 今後の気温上昇に伴って増加が見込まれます。

防除上の注意事項

- 1) ネギアザミウマの加害による新葉の奇形・萎縮を注意して観察し、発生を認め次第、防除を行います。
- 2) ネギアザミウマは広食性で多種の植物に寄生するため、ほ場周辺の雑草や、アスパラガス、ネギ、タマネギ、ナスなどの他の野菜類などが発生源となります。
- 3) 発生源となる雑草の除草を徹底します。ただ、除草後にはアザミウマがほ場内に移動するため、発生に注意します。
- 4) ほ場周辺で自家用の作物を栽培している場合は、ネギアザミウマの発生源とならないように適宜防除を行います。

4. ネギ

(1) ネギハモグリバエ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、発生圃場率 50%、寄生株率 3.0%でした。

防除上の注意事項

- 1) ベリマークSCの生育期株元灌注処理の効果が比較的高いため、発生初期に処理します。処理薬量が少ないと効果が低いので、ラベルに書かれた濃度、薬量をよく確認して処理します。また定植ネギの場合は、育苗期後半～定植当日に育苗トレイに灌注処理を行います。
- 2) ベリマークSCの生育期株元灌注処理後も発生によく注意して、再発生が見られた場合はリーフガード顆粒水和剤などを散布します。散布の際、ネギは薬液をはじきやすいため、スカッシュ、まくびかなどの展着剤を加用します。
- 3) ハモグリバエが多発した残さは次の発生源になるため、できるだけほ場の外に持ち出して処分します。また、多発ほ場の株元土中にはハモグリバエの蛹が高密度で残存するため、次作の前にバスアミド微粒剤などを処理します。

(2) ネギアザミウマ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率100%、被害株率62%でした。

防除上の注意事項

- 1) ベリマークSCの生育期株元灌注処理でネギハモグリバエと同時に防除します。また定植ネギの場合も同様に、育苗期後半～定植当日に育苗トレイにも灌注処理を行います。
- 2) ベリマークSCの株元灌注処理後もよく観察し、再発生が見られた場合はスピノエース顆粒水和剤、アドマイヤーフロアブル、ファインセーブフロアブル、プレオフロアブルなどを散布します。散布の際、ネギは薬液をはじきやすいため、スカッシュ、まくびかなどの展着剤を加用します。
- 3) 一部の地域で殺虫剤感受性の低下した個体群が認められます。防除効果に疑問を感じた場合は、各農林（農業）振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。

5. キク

(1) 白さび病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率40%、発病葉率1.0%でした。
- 2) 今後も天候不順が続くと発生が拡大する恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 梅雨明けまでは定期的な予防散布に努めます。
- 2) 発生ほ場では、発病した下葉を早目に取り除いて処分してから、防除を行います。今後降雨が続く場合には上位葉～中位葉を中心に薬剤をていねいに散布します。
- 3) 発病前からダコニール1000やQoI剤、DMI剤、SDHI剤等を用いて防除します。但し、耐性菌の出現を避けるため同一系統薬剤の連用は避けます。

(2) 褐斑病・黒斑病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率40%、発病葉率2.2%でした。

防除上の注意事項

- 1) 密植や過繁茂にならないよう通風を図るよう管理します。
- 2) 発生ほ場では下葉の発病葉を直ちに除去し、埋没処分します。
- 3) 発生初期にはダコニール1000等で防除します。

6. 野菜類・花き類共通

(1) アブラムシ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い（ホウレンソウ、キク）

平年並（イチゴ育苗、ナス、トマト）

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率はイチゴ（育苗）17%、ホウレンソウ50%、キク40%でした。ナス、トマトでは発生は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) 薬剤感受性が低下しやすいので、同一系統の薬剤を連用しないように注意します。
- 2) ネオニコチノイド系薬剤に対する感受性が低下したワタアブラムシの発生を確認しています。同じ系統の薬剤の連用を避けます。防除効果に疑問を感じた場合は、各農林（農業）振興事務所または病害虫防除所にご相談下さい。

（2）ミナミキイロアザミウマ（ナス等の果菜類）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：少ない

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、ナスでの発生は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) 施設ナス収穫終了後は、好天日に2～3日間ハウスを密閉して60℃以上の高温で虫を殺してから、片付け作業を行います。
- 2) 土着天敵保護に取り組んでいる夏秋ナスのほ場では、6月上旬から土着天敵が増加しています。引き続き、ピレスロイド剤、ネオニコチノイド剤、有機リン剤、カーバメート剤、マクロライド剤等、天敵に悪影響のある薬剤の使用を控えます。
- 3) カメムシ類防除のためにネオニコチノイド剤を使用すると、土着天敵が減少して被害が急増する可能性があります。7月上旬までの散布であれば2週間程度で土着天敵が戻って来ますので、それまでの間の対策としてファインセーブフロアブルなどを散布します。

（3）ハダニ類（イチゴ育苗・ナス・キク）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：多い（キク）
平年並（イチゴ育苗、ナス）

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率はイチゴ育苗25%、夏秋ナス17%、キク100%でした。

防除上の注意事項

- 1) 周辺で除草が行われていたり、植物残さが積み上げられた場合はハダニの侵入が予想されるので、注意して葉裏を観察します。
- 2) 雨除けや施設栽培ではハダニが増加しやすいので特に注意します。
- 3) 薬剤を散布する場合は、まず、不用な下葉・古葉の除去、整枝、剪定を行い、葉裏に薬液がかかりやすい状態にしてから行います。
- 4) 夏秋ナスでミナミキイロアザミウマ対策のため土着天敵保護に取り組んでいる場合はダニサラバフロアブルで防除します。またチャノホコリダニと同時防除する場合はスターマイトフロアブルで防除します。
- 5) イチゴでは、薬剤のかかりやすい育苗期は薬剤感受性が低下しにくく、土着天敵への影響が小さい気門封鎖剤を主に利用します。
- 6) イチゴやキクに発生するナミハダニ黄緑型は薬剤感受性の低下した個体群が見られます。薬剤散布2～3日後に防除効果を確認して、効果が低い場合は各農林（農業）振興事務所または病害虫防除所にご相談下さい。

（4）コナジラミ類（イチゴ育苗・ナス・トマト）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並（イチゴ育苗、ナス）
やや少ない（トマト）

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、発生は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) 施設栽培では増えやすいので、生長点をたたいて白い成虫の飛び出しが見られたら早めに防除します。また、栽培終了後に地際で作物の茎を切ってから施設を1週間程度閉め切り、作物を枯らせ、コナジラミ類の周辺への分散を防止します。
- 2) タバココナジラミ類、オンシツコナジラミ共に薬剤感受性の低下が進んでいます。薬

剤の効果が低い場合は、各農林（農業）振興事務所または病虫害防除所にご相談下さい。

(5) オオタバコガ（トマト・ナス・キク）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、発生は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) 7月は増加期になりますので、注意して発生の有無を観察します。
- 2) 孵化幼虫は株上部の新芽や花蕾から食害しますので、この付近をよく観察して、発生が見られたら直ちに防除します。発育が進むと薬剤の種類によっては効果が低下しますので、発生初期の防除を徹底します。
- 3) 主要な登録剤に対する感受性低下は確認されていませんが、今後の抵抗性発達防止のために同一系統剤の連用は避けます。
- 4) 夏秋ナスでは、アズキノメイガが発生している場合はフェニックス顆粒水和剤で、ニジュウヤホシテントウが発生している場合はアクセルフロアブルで同時防除します。
- 5) 4mm目合いの防虫ネットは侵入抑止効果が高いです。盛夏期の防除回数低減のために、設置を検討しましょう。

(6) アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ等）

(夏秋トマト・キク)

予報内容 発生時期：平年並 発生量：多い

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回では、発生ほ場率は夏秋トマト67%、キク60%でした。

防除上の注意事項

- 1) 花き類では収穫適期を過ぎた放置株がアザミウマ類の温床となりますので、直ちに処分します。
- 2) アザミウマ類はほ場周辺のクローバー、ヒメジョオン等の雑草の花に多く集まります。雑草の開花前に除草を徹底します。開花後に除草すると餌を求めてアザミウマがほ場内に移動しますので、注意します。
- 3) アザミウマの種類によって薬剤の効果が異なります。薬剤の効果が低い場合は各農林（農業）振興事務所または病虫害防除所にご相談下さい。
- 4) トマト黄化えそウイルス（TSWV）等を伝搬するので、発病株は早急に処分します。

※農薬に関する情報は、令和5年6月21日までの農薬登録情報に基づいて記載しています。

お問い合わせは

奈良県病虫害防除所

TEL. 0744-47-4481

その他関連情報は以下をご覧ください

病虫害防除所ホームページ

<http://www.jpnpn.ne.jp/nara/>

奈良県農薬情報システム（農作物病虫害・雑草防除指導指針）

<http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/top/nara>